

～地域住民を繋ぎ親しめる自然環境に向けて～

桜川多面的機能活動組織

地域の特徴

桜川は桜川市北部、岩瀬地区の鍬柄峠付近にある鏡ヶ池に源を発し南へ流れ、土浦市のJR土浦駅付近で霞ヶ浦に注ぐ利根川水系の一級河川である。また、明治43年に邊田栄蔵氏が足の病気の全快のお礼にと、堤下の道祖神に200本の桜を寄進したのが始まりで、現在は約4kmにわたり500本近いソメイヨシノや、土浦橋付近の河川敷には菜の花等が植えられ風光明媚な場所として親しまれている。



桜川の現状と活動組織の歩み

桜川は数十年前まで河川で遊ぶ子供たちもみられたが、現在ではそういった光景も全く見られなくなってしまった。殆ど人が入らなくなった河川敷は、雑草が生い茂り、鬱蒼とした雑木林となり漁業者以外は誰も近寄らない川となってしまった。そのため、不法投棄も多くみられ、河川環境は著しく悪化してしまっただ。そこで、その現状を打開すべく漁業者が中心となって、「昔自分たちが遊んだ川を取戻し、子供たちが安心して訪れることができる川にしたい」という思いから活動を開始した。活動は、17年前から漁協が独自に河川の清掃活動などを開始した。その後、平成25年に「桜川多面的機能活動組織」を立ち上げ、水産多面的機能発揮対策（以後、多面的と称す）に参加し、活動を行っている。



組織の活動方針

基本的な活動の方針は、様々な活動を通して、地域に密着した形で、桜川の環境を改善する取り組みを行うこととしている。活動の内容は、多面的な活動としては、河川清掃、河床耕耘、環境体験学習などを行っている。また、それと並行して「つくば市水質浄化対策推進協議会」の活動とも共同で、河川敷での花畑の造成や幼稚園生に向けたお花見体験なども行っている。加えて、毎年「科学と環境のフェスティバル」に参加し、桜川の環境や河川の重要性などの啓発活動を行っている。その他にも、①特定外来種であるアメリカナマズの釣り大会を行い、外来種の駆除を行う活動、②環境学習等に参加している小学校を対象に「水辺に親しむ野外体験学習標語コンクール」に出展してもらい、県知事賞等を受賞するなど、桜川を通じて多岐にわたる活動を行っている。



活動内容

主な活動内容は大きく分けると以下の3つである。

◆耕耘：河川耕耘は、瀬の一部を重機で耕し、アユやオイカワなどの魚の産卵場としての整備効果や、浮石にすることで底生生物の生息環境を整えるために行っている。また、その後の環境の変化を把握するために底生生物や魚類のモニタリング調査を行っている。



◆環境保全：親しみやすい河川環境づくりの一環として、河川敷の清掃活動、不法投棄のモニタリング調査、除草や花畑の造成など様々な活動を行っている。また、河川内の清掃や河岸の整備、それに伴う魚類等のモニタリング調査も定期的に行っている。



◆教育啓発：主に地域の小学生に向けた環境教育や放流体験を毎年行っている。また、「科学と環境のフェスティバル」に参加し、市民に向けた河川環境の保護・啓発活動などを行っている。近年では新たにワカサギを楽しむ会などを行い、桜川に興味を持ってもらい、新規の漁業者や遊漁者の開拓に繋げる活動を行っている。



成果と課題

活動の成果としては、河川ごみの減少や、不法投棄の減少、水産資源の回復（スジエビの増加など）などが挙げられる。それに伴い、河川景観が回復し、地域住民に桜川の大切さが再認識されるようになったと考えている。また、小学生や地域住民に桜川で遊んでもらえるような環境を整備し、より身近に自然を体験してもらっていること。それによって、桜川の現状とこれからを考える良い機会を与えているのではないかと考える。

現在は様々な活動が実を結び、地域の住民と協力して活動を行っている。今後の課題としては、活動主体である漁業者の後継者不足が挙げられる。現在、桜川での漁業自体が利益を得られる実態がなく、趣味の延長であるため、若い組合員の加入がない。現在の組合員の平均年齢は約75歳と高齢で後継者の確保が急務となっている。そのため、今後は後継者の獲得と育成に向けた活動を行っていく必要があると考えている。

